

年収75万円——「農業に未来はない」

白色申告から青色申告に変更した専業農家の木内家。家族一人当たりの年収が75万円であることが判明する。農業の希望のなさに呆然としながら、畑作業中に頭をよぎるは将来への不安ばかりだ。ある日、ニンジン畑で作業をする母の背中を見つめてみると、ある思いがこみ上げてきた。農業経営者・木内博一の誕生秘話。

木内博一の 和のマネジメントと 郷の精神②

私が就農した時期、木内家は露地の畑作を中心の営農で、確定申告は白色申告だった。現在の個人農家では青色申告が主流だが、当時は白色申告も多かった。読者もご存じのとおり、その申告のやり方は昔ながらの実に大雑把なもの。「芋類」「稲類」などといった分類に分かれ、それらをどのくらいの面積で作っているのか申告するだけだった。

たとえば、○○類を10反作ったとしたら、「○○類は反当り平均10万円なので、売上は10反×10万円＝100万円です」となる。このように、作物ごとに反当りの売上が決められており、鉛筆を舐めるように簡単に申告するわけだ。

この申告が何を意味するかといえ、多くの農家が農業では詳細な算出を必要とするほど売上が出せていなかったということだ。「売上」という概念さえなかったといってもいいかもしれない。何しろ現在でも「売上」という概念を持たない農家はた

くさんいるとおりだ。

話を木内家に戻すと、私が継ぐということを知った近所の農家の人が、父にこう言った。

「そろそろ木内さんのところも、青色に変えてみてはどう？」

その言い方がうちを小バカにしたような言い方だったので、父も面白くない。「うちも青色にすっぺ。お前がやれや」ということになり、私が青色申告をすることになった。

計算してみると、まず、家の売上が720万円であることが初めて分かった。ここから機械代や資材、種代などの経費を差し引いていくと、収入に該当する残りは約300万円。両親と祖母、私を合わせた4人で年収300万円、つまり一人当たり75万円ではないか。これが「農業＝本業」の経営状態だった。「これじゃ、まるでビジネスとして成立していない……」

父がよその手伝いなどをして別に400万円ほどの収入があったの

で、食っていくには困らない。しかし、そうはいっても両親も祖母も忙しく働いているのだし、たとえばこれがほかの業種だったらどうなのか。年収75万円で働いている人たちがいて、一年を通すと赤字になっている会社のようなものだ。

農業という職業の壁

この事実を知ったときに、私は「農業には未来がない」という言葉の意味を痛感した。

それでも農家が農業を続けているのは、ほかにやれることがないからではないか。そして、親が子供に継がせようとしないうちに、農業をやらせないように教育しているのも、当たり前前のことではないか、と——。

当時、父は冬になると近隣の根菜類の産地問屋に働きに行っていた。産地商人のような問屋で、ゴボウやニンジンなど根菜類の収穫機械のオペレーターとして季節的に働いていた。

私が就農してから、祖母はあまり畑に出なくなりました。そのため主に両親と私の3人で仕事をするようになります。父が商店で働く冬は、私と母の2人で農作業をすることになった。

そんな、ある冬の日のこと。私は母と2人でニンジンの間引き作業を始めたが、これがなかなか大変だった。腰を曲げて3粒くらいの芽を1本に選抜していく作業が、延々と続く。しかも母に聞くと、私の就農以前はこの作業を母が一人でやっていたといい、私に加わったその年は自分の作業量が減ったので足取りが軽いという。

ところが私のほうは、作業を始めてすぐに「早く10時の休憩がこないかなあ」と考え、休憩が終わると、今度は「早く昼ごはんの時間にならないかなあ」、そして午後は「早く日暮れにならないかなあ」と、こんな調子だった。

目の前に広がるのは、1ヘクタールほどの畑。これを手前からニンジンの間引きをしながら、「いったいいつになったら向こう側に着くのだろう」「いったい何日かければこの作業は終わるのだろうか」と、そんなことばかりを考えていた。

子供の頃に農作業をやっていたので、好きではないにしても作業そのものには抵抗はなかった。しかし、

生まれて初めて職業としての農業に接したとき、職業としての辛さ、壁にぶつかつた。

頭のなかにさまざまな不安がよぎった。年をとっていく母はこの作業にこれからも耐えられるだろうか。自分は来年、耐えられるのだろうか。……これから長いあいだ、自分は本当に農業をやっているのだろうか。……そして不安はほかの面にも向かっていった。

もし自分が結婚したとして、奥さんになる人は母と同じ作業をやっているのだろうか。1年働いても年取は一人当たり100万円にもならないのに、その人に「一緒に作業をしてくれ」と自分にはいえるだろうか……。

私は初めて大人として自分の将来を見つめたのであり、農家として生きていくことの希望のなさに呆然としたのだ。

ニンジン畑での決意

ところが畑の真ん中で大きなため息をつく私を尻目に、母はいつ終わるか先が見えない作業を黙々とこなしている。そんな母の背中を見ながら、私はつくづくと思った。

「お袋はたいしたもんだなあ……」
子供の頃からやんちゃで、少々ア

ウトローな生き方をしてきたので、当時の私は人を尊敬するということを心がけてはいなかった。自分の目標が見つかからない苛立ちもあり、むしろ両親や大人のいうことに対して、反抗期の子供のようにそっぽを向くようなところがあった。

しかし職業としての農業に接し、大人の大変さを知ったときに、両親や祖母、曾祖母といった自分を育ててくれた人たちの人生を思い、尊敬の念を抱くようになった。

それと同時に、こんな思いを抱くようにもなった。

母のように、農村でひたむきに生きてきた女性たちがたくさんいる。畑で忙しく働き、子供も育てていく、そんな女性たちが農村を支えてきたのだ。にもかかわらず、農業は「3K」以下とまでいわれることさえある。それに、自分自身、職業は何かと聞かれて「農業」と胸を張ってはいえないではないか。

これじゃ、駄目だ。農業を人が憧れるような仕事にしなければならぬ。もっと存在価値のある、もっと事業的な農業に——。このとき生まれてはじめて私は決心をした。

「よし、だったら俺が、農業を変えてやろう」

木内博一・Hirokazu Kiuchi

1967年千葉県生まれ。農業者大学校卒業後、90年に就農。96年事業会社南和郷を、98年生産組合(農)和郷園を設立。南和郷は2005年に(株)和郷に組織変更。生産・流通事業のほか、リサイクル事業や冷凍工場、カット・パッキングセンター、直営店舗の展開をすすめる。05年海外事業部を立ち上げ、タイでマンゴー、バナナの生産開始。07年日本から香港への輸出事業スタート。現在、ターゲット国を拡大準備中。本連載では、起業わずか10年でグループ売上約50億円の農系企業を築き上げた木内の「和のマネジメントと郷の精神」。本連載ではその「事業ビジョンの本質」を解き明かす。



「園芸美」を競う世界最高峰「チェルシーフラワーショー」(英国王立園芸協会主催)にいらってきた。庭造りは楽しい。